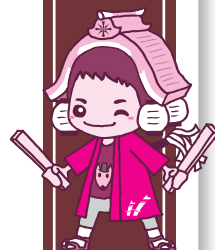


だし丸くんしポート〜半田の魅力を再発見〜

第11回

幕末にあつた不思議な出来事

―御札降りといえぢやないか騒動―
半田市文化財専門委員会 委員長 河合克己



慶長3年（1867年）9月25日午後10時頃、座敷でくつろいでいた万三の御当主小栗三郎兵衛は、屋根から何かが庭へ落ちたように感じた。調べてみると木箱に入った天照皇大神宮（内宮）の神符であつた。その夜は神棚に祀つて床に就いたが、翌朝午前5時、再び熱田皇大神宮の神符が庭の松の枝に引っかかっているのが見つかった。

このめでたい出来事に、同家では店に仮社殿を設けて御神酒や鏡餅を供え、葉神社の三浦肥後守の応援も得て、毎晩篝火を焚き七昼夜お祀りをした。近所の中笠又左衛門、西尾の深谷半左衛門等、遠近の知人や参詣人が多数訪れ、下半田祭り組の若い衆が祭装束で勇み込んだりして大賑わいであつた。

さらに、満願の10月2日午後11時頃、3枚目の豊川大明神の御祓い札が庭に降ると、人々はこの奇瑞に、振る舞われた樽酒の酔いも手伝つて祝い踊り狂つたという。

ちなみに、小栗家は満願の日を用意した170人分の膳部や毎日の樽酒代、また、事後に村内外の神社へ配つた御供物や記念品等で百五十五両二分と銀八匁六分三厘を支出している。

筆まめな小栗三郎兵衛の記録によると恵郎会所、三郎介会所など近隣の富

豪にも降つたといふ。この他、半田市内では成石村西成石に112枚、亀崎村伊東孫左衛門家、間瀬兵左衛門家、半田村味噌溜醸造「丸佐屋（小栗家）」（半田駅北）にも降札があつた。

知多地域の各地にも降札があり、中でも大井村の121枚は有名。県内でも名古屋をはじめ各地に降札記録が残るが、豊橋牟呂八幡宮に降つた7月14日が全国の御札降りの始まりで、そこから日本中へ伝播したよつてである。

慶応3年といふ年は激動、且つ大転換の年であつた。10月15日、將軍徳川慶喜が大政奉還を朝廷に申し出たが、朝廷から薩長に討幕の命令が下されたのも同日のことであつた。世間では、前年の凶作によつて米価が騰がり始め、民衆は生活に不安を感じ始めていた。同時に「世の中が変わるのではない」とかといふ期待感も何となく肌で感じて取つていたよつてである。

そんな中、神様の祓い札が家々に降るといふ常識では考えられない不思議な出来事が口伝に伝わると、昔「世直し」を願つて流行した御陰参り踊り（えぢやないか踊り）がどこからともなく発生して流行し、それが大きなつねりとなつて全国へ伝播していったものと考へられている。

現在のところ降札が人為的なものか、



▲国登録有形文化財の小栗家住宅
参考文献：牟呂八幡留記、名古屋大学教授伊藤忠士研究論文、静岡大学名誉教授田村貞雄研究論文、半田市誌、半田市誌補遺（亀崎編）、亀崎町史、大府市誌、南知多町誌、大井郷土誌「大青」、豊橋市誌、刈谷市史、小栗康義氏談他

「大地震トカゲテ…大神宮ノ御陰ト解ク」

「二〇八」（御陰）で日本国力動ク」

神の思召しなのか明らかではないが、御札降りに触発されて、武士によつて長期抑圧されていた民衆の大きなエネルギーの爆発が感じられる興味深い事件である。研究も大正4年の論文が最初で、まだ研究の余地が残る。

最後に、御陰参り道中の口合（くちあひ）をわせ）を紹介してこの項を閉じる。

防災 Memo 11

地震に強く安全な住まいにしましょう

地震に負けない丈夫な家にしたいと思ったら…

耐震改修工事をしましょう。

無料耐震診断の結果「倒壊する可能性がある」と診断された住宅を対象に耐震改修工事費の一部を補助しています。

- ・改修費補助金……………最大120万円
- ・所得税減税……………上限25万円の税控除
- ・固定資産税……………1年間1/2に税の減額

リフォームにあわせて
耐震改修を行うと
効果的です！



●問合わせ 建築課 ☎84-0671